

國學院大學學術情報リポジトリ

唐代伝奇小説における変虎譚の諸相：
中島敦「山月記」に及ぶ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤井, 益久, Akai, Masuhisa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000576

唐代伝奇小説における変虎譚の諸相

— 中島敦「山月記」に及ぶ —

赤井益久

一 はじめに

六朝期における志怪小説以降、唐代伝奇小説に至る間、話柄の進展として「人化して虎と為る」説話に関心が持たれたのは、一つは人が虎に変身する（あるいは虎が人に変身する）「変虎譚」であり、もう一つはいわゆる「異類婚姻譚」の一種としてである。それらの代表的作品は、『太平広記』巻四二六から巻四三三に至る「虎」の部門に所収される八〇話に見ることができる。それらを概観して、この二つの要素に大別して考察す

ることは、唐代伝奇小説が到達した文学的な意味をとらえるうえで、不可欠な作業である。便宜上、「異類婚姻譚」から見ることにする。

二 「申屠澄」と「白鳥処女説話」

「異類婚姻譚」としては、まずは「申屠澄」（『太平広記』巻四二九・虎四）を見るべきであろう。その梗概は以下の通りである。

申屠澄は漢州の什放原尉に赴任する途次、真符原の東十里ほどで風雪に遭い、周囲に暖を求めた。近くに煙火が昇る一軒の茅屋を認めて宿泊を願ひ出る。家には老夫婦と十四五歳の少女がいる。老夫婦は申屠澄に火に近づき暖を取らせ、酒を勧める。せっかくの機会だからと余興に酒令を設けて、現在の気持ちに古典に託して詠じることにする。その応酬を通じて少女の非凡さを認めた申屠澄は、気に入る結婚を申し出る。今まで多くの者が求婚してきたが、娘と別れるのに忍びなく断ってきた父親も、申屠澄の人物を認めて許すことにする。乗ってきた馬に娘をのせて旅立った。任地につくと、妻は懸命に一家を切り盛りし、人付き合いもそつなくこなし、十日の内に周囲の評判を得た。妻の夫の親族に対する思いは厚く、下僕や婢女に至るまで愛情が行き届いていた。役人の任期が満了すると、故郷に帰ることになった。すでに男女一人ずつの子供が生まれ、何れも聡明であり、澄の妻への愛情はますます深まっていた。二十日ほど経過して、妻の実家に戻った。草ぶきの家は依然としてそのままであったが、人影は見えなかった。澄は妻とともに、その小屋に泊まることにした。妻は両親を慕い、一日中泣き続けていたが、壁の隅にあった昔の着

物の下から、塵にまみれた虎の皮を一枚見つけた。妻はそれを見るなり急に大声で笑い出し、「これがまだここにあったのね」と言って、その皮を着ると、たちまちに虎に変わり、そして咆哮し、爪を立てて地面を蹴って扉を突き破り走り去った。澄は驚いて逃げ出し、二人の子供を連れて虎の去ったあとを追った、林を望みながら何日も大声で泣いた。その行方はとうとう分からなかった。(出典は、唐・裴鉞『傳奇』)

本話は明・曹学佺『蜀中広記』(巻八〇、四庫全書) 神仙記第十「附録鬼怪」に『太平広記』を典拠に全文が所収されているのはじめ、明・陳繼儒の『虎薈』(巻四、叢書集成初編)、高麗僧・一然『三国遺事』(巻五、感通第七、金現感虎)、明・馮夢龍の編輯と考えられる『情史』(あるいは『情史類略』)、清・葆光子輯『物妖志』(虎)(香艷叢書第十集)などに所収されている。内容は「異類婚姻譚」に属し、恋愛物語の様相を呈しているところが、多くの関心を引いたものと思われる。とくに見目麗しい美女が結婚して良妻賢母として暮らしながら、のち「虎皮」を纏うことによって、野生を露わにした虎に戻るといふ衝撃は、読む者の心をとらえる。ここに「変虎譚」における神性

と獸性とを顕著に見ることが出来る。異類婚姻譚においては、獸夫と人妻、また男子と獸妻とのパターンがあり、「申屠澄」はむしろ後者の代表的作品である。

この「申屠澄」は、世界的に分布する「白鳥処女説話」(中國においては「天鷲処女説話」とも言う)に属すると見なす学者がいる。李艷茹氏は以下のように論評している。「この物語は全体のプロットや題材から見て、さらに深刻なテーマすなわち『白鳥処女説話』を含蓄している。物語のプロットは(虎皮の脱皮)↓(女性へ変身)↓(虎皮を秘匿される)↓(男性と結婚)↓(虎皮の発見)↓(変虎して去る)に区分され、白鳥処女説話の変形である。現代の学者である李道和氏は白鳥処女説話の由来を、殷周期の祓禊習俗にみとめ、漢代に至ると上記の節句と結びつき、晋代に至って基本的な構成を形成した。」と指摘している。³⁾

「白鳥処女説話」は、⁴⁾通常以下のようなプロットを持つ。わが国に伝わる『近江国風土記』に従えば、①水源地(湖、池など)に白鳥が飛来して羽衣を脱ぎ、女性の姿を現す ②天女が水浴びをしている間に女性に心を奪われた男が羽衣を隠す ③天女は天に帰れなくなってしまう という内容である。「虎皮」と「羽衣」という差はあれ、彼此の境を超越するアイテムの存

在とプロット上の類似は注意してよいであろう。しかし、物語に占める「獸性」の比重は変虎譚においては重く、決定的な要素として機能している。「申屠澄」に類似する作品に、「天宝選人」(巻四二七・虎二)がある。その梗概は、以下のようである。

天宝年間、科挙に推薦された男が都に上ろうとした。途中日暮れになり、ある村の僧房に投宿する。翌早朝に出発しようとして院内を歩いていると、破屋中に十七八歳の美女が虎の皮を布団替わりに寝ている。男は密かに近づき虎皮を隠してしまう。少女は目が覚め、びっくりし恐れて男の妻となった。その理由を尋ねると、逃れるのは難しいからとのこと。虎の皮を隠したことは秘密にした。妻を連れて科挙に応じ、登第して任地に赴いた。数年で任期が満ち、二人の間には数人の子供があった。一家で旅をしているときに、以前に投宿した僧院に再び宿ることになった。男は妻に向かつて言った。ここは君と始めて出逢った場所である、覚えておるか。すると妻は急に怒り出し、私は本来人間ではなく、偶々男にとらわれ、子供までもうけ、嫌でいやでたまらなかつた。仕方が無く付き従っていただけ、今また辱めを受けようとは思わなかつた、虎の皮を返せと迫る。

男は詫びたが、妻の怒りはいよいよ激しくなり、虎皮のありかを言ってしまう。北屋に隠してあった虎皮を手に入れた女は、怒り益々激しく目は稲妻のように輝き、跳躍したかと思うと大きな虎に変身し、振り返り咆哮し山中に消えていった。男は子らを連れて去って行った。(出典は、唐・皇甫氏『原化記』)

この点につき、小澤俊夫氏は以下のように述べている。「ここにいたって、この話はじつは『天人女房』のあの、「羽衣」をめぐるモティーフとひじょうに近いことがはっきりした。『天人女房』では、天人の衣を取った男自身が天人を妻としている。(略)『虎女房』は人物が複雑化されているが、構造としては『天人女房』と同じと考えてよいだろう」⁵⁶⁾。

三 「虎の皮」

主人公の申屠澄が結婚後、妻の実家を訪れると、草屋は昔と変わらずに依然としてあった。妻はその壁の片隅に、古着に紛れて「一虎皮」を見つける。これを契機に妻は虎に変身して山中に身を隠すことになる。翻ってみれば、申屠澄の妻はじつは

虎の化身であり、妻は仮の姿、虎の姿こそが「本身」であった。いわゆる虎に関する変身譚の中で、「虎皮」は重要な構成要素である。「虎皮」の例は『太平広記』「虎」部門に集中して認められ「申屠澄」以外に、「溪口道士」(巻四二六・虎一、出典は『解頤録』)、「天寶選人」(巻四二七・虎二、出典は唐・皇甫氏『原化記』)、「王居貞」(巻四三〇・虎五、出典は唐・裴鉞『傳奇』)、「僧虎」(巻四三三・虎八、出典は『高僧伝』)、「崔韜」(巻四三三・虎八、出典は唐・薛用弱『集異記』)などに登場する。例を二つほど見てみよう。「溪口道士」の梗概は左のようである。

開元年間、峡口には虎の被害が多く、往來の船が峡を下るときには生け贄を差し出した。そうでないと船中の被害が増大した。ある時、船中の客は皆富裕であり、一人の貧乏人が生け贄に選ばれた。別れるに際して、その貧乏人は皆の代わりに死ぬのであるから、わが言うことを聞けと言う。その男の言うには、陸に上がり、虎の足跡を追う、そこで一計があるので、流れの難所で私の帰りを待っていてくれと言う。約束の日の正午を過ぎて戻ってこなければ船を出せとのこと。男は岸が上がって虎の足跡を追う。暫く行くと石洞があり、中に石床があって道士が寝ており、

傍らに「虎の皮」が掛かっていた。男はそれを取り上げ、斧を手に道士に臨む。目を覚ました道士は虎の皮の奪われたことを知り、男を食い殺すと脅す。男の方も負けじとけんかを仕掛ける。言い負けた道士は、事実を男に告げる。じつは道士は天帝に罪を得てこの地に流され、虎となつて千人を食い殺さねばならない。あと一人を欠くだけとなつた。男に虎の皮を奪われた以上、再び別の虎となつて千人の命を奪う必要があると。道士は一計を案じ、提案する。男には虎の皮を持って船に戻り、髪の毛とひげを若干、指の爪、頭から足に及ぶ体から血液二三升を抜き取り、古着に包んで持って来いと伝える。男は船に戻り、道士の到着を待っている。先ず虎の皮を道士に渡すと道士は虎に変身し、つぎに古着の包みを渡すと、虎はそれを喰らつた。このことがあつてからは、この地では虎の被害はなくなつた。人々は口々に虎の食べた人数が千人に上り、虎は天上に帰って行つたのであろうと言ひ合つた。(出典は、『解頤録』)

「崔輶」のあらすじは次のようである。

蒲州の人である崔輶は、滁州を遊歴する途中「仁義館」

に投宿する。馱の役人はここは不吉であり止めた方が良いと言う。崔輶はこれを聞かずに宿泊する。夜半、寝に就くと正門から一匹の虎が入ってくる。中庭で虎の皮を脱ぐと妙齡の女性になり、崔輶の寢室にやってくる。娘の言うには、父と兄は猟に従事しているが家は貧しく、自らは良き伴侶を求め、夜になると密かに虎の皮を着て君子を訪れているとのこと。これまでここを訪れた賓客は、自ら驚いて命を落とした者、今日は優れた君子に会えて幸いであり、わが意を察してくれと言う。崔輶は娘の来ていた虎の皮を古井戸の中に投じてしまう。娘と結婚し、明経に合格した崔輶は、妻と子を伴い宣城に赴任することになる。途中ふたたび「仁義館」に投宿する。崔輶は古井戸を覗いてみると、昔のまま残っていた。崔輶は妻に、ここは君と始めてあつた場所、虎の皮も昔のままだと言う。妻は虎の皮を着てみたいと言ひ、「虎皮」を身に纏うと忽ち虎に変身し、跳躍咆哮したかと思うと子供と崔輶を喰らつて去つて行つた。(出典は、唐・薛用弱『集異記』)

「溪口道士」は、変虎譚の中で「人が虎に変身する」動機として一つのまとまりを持つ「罪過による変身」の話柄であり、

「崔韜」は前述した「白鳥処女説話」型を有する話柄である。前者は後に述べることにして、後者の構成要素を挙げてみると、〈虎の皮の脱皮と窃視〉→〈女性への変身〉→〈結婚〉→〈虎の皮の秘匿〉→〈虎の皮の奪還〉→〈虎への変身〉という要素であり、たしかに「白鳥処女説話」に類似することが分かる。

両者の話柄における「虎の皮」は、異類と人間との境界を越境するアイテムとして登場する。その着脱は瞬時にして異世界に行くことができ、その扱ひも通常の衣服と同様に簡便であり、人間が異類に変身するという非合理性を合理的解釈に引き寄せることができている。

この点について、岡田充博氏に次のような指摘がある。「中国の場合も、虎への変身に獣皮と衣服が登場する。しかし先に述べたように、起源として古く基本的なのは虎皮の方であり、以後もこの方法が受け継がれる。(そこから派生したと考えられる衣服の着脱には、虎皮の併用は見られない。)この衣服重視と虎皮重視の相違には、変身の能動・受動の性格が深く関わっている。自らの意思によって変身するヨーロッパの人狼は、衣服(文明)をかなぐり捨てて野生を露わにするのであり、罰によって変身する中国の場合は、虎皮(野生)に包まれて文明から拉致されるのである。」⁶⁾

この際における「虎の皮」は、いわば「獸性」の獲得を象徴していると思われるべきで、人が虎に変身する動機や理由として極めて理解しやすい。たとえば「王居貞」(『太平広記』卷四三〇・虎五)は、プロットとして「白鳥処女説話」に近い要素を持ちながら道士から借りた「虎の皮」を着けて虎に変身してわが家に帰り、わが子を襲って喰らうという所業を人身に戻って自覚するという構成になっている。この「虎」と「人」との間の齟齬と葛藤とが、この説話には同時に包含されていることが分かる。

四 「罰せられて虎と為る」

「罪過による変身」は、変虎譚の主題を考える場合に極めて重要である。すでに挙げた「溪口道士」には、虎となって人を襲う道士がじつは天界において罪を犯した罰として人間世界に墮とされてきた者として描かれている。原文には「吾有罪于上帝、被謫在此爲虎(吾上帝に罪有り、謫されて此に在りて虎と爲る)」とある。これに類する話柄は少なくない。「呉道宗」(『太平広記』卷四二六・虎一)には、虎に化した母親が息子の道宗にいった言葉「宿罪見譴、當有變化之事(宿罪見譴められて、當

に変化の事あるべし」(出典は南朝宋・東陽無疑『齊諧記』)、
 虎への化身は罪業によると言うのである。

また、「費忠」(『太平広記』巻四二七・虎二)には、以下の
 ような興味深い話を載せている。

費州の蛮人は一族挙げて費を姓とした。土地には虎暴が
 多く、人々は虎の害を避けるために樹上に昇った。野宿す
 るときは火を焚いた。開元中、狄光嗣てきこうしが刺史となり、その
 孫が官舎で生まれた。その乳母の夫である費忠は勇敢で弓
 矢が得意だった。以前、費忠が食糧を持参して家に帰ろう
 としていた折、日暮れになったので食糧を隠した。そして、
 火を焚き刀を手にして樹上に昇り、虎の襲来から身を守つ
 た。しばらくすると四匹の虎が現れ、そのうちの一匹の大
 虎が虎の皮を脱いで老人となった。それを見た費忠は樹上
 より降りて老人の喉を掴み刀で首を切ろうとした。老人は
 命乞いをして言った。「自分は南村の費老と言ひ、罰せら
 れて虎にされました。天上の世界には日曆があつて日ごと
 に喰らう人間が定められています。今夜はちょうど費忠と
 という人物を食べなければなりません。それでその人を待つ
 ていたのです。まさかあなたに捕らえられるとは思ひませ

んでした。もし嘘だと思ふならば腰にある日曆を見てくだ
 さい」日曆を見た費忠は、どうすればその危難から免れる
 ことができるかを尋ねた。費老は言う。同姓同名の人間が
 いれば代わることができる。老人に虎の皮を返却すると
 帰つて行つた。数日後、南村の費忠は畑仕事の際に虎に襲
 われて食われてしまった。(出典は、唐・戴孚『広異記』)

この話には注意すべき点がある。その一つは、「被罰爲虎(罰
 せられて虎と爲る)」すなわち虎に変身したのは罪を犯し罰を
 受けている点であり、もう一つは「天曹有日曆令食人(天曹に
 日曆有り人を食はしむ)」すなわち虎になつて毎日喰らうべき
 人間が定められているという点である。つまり、「費忠」をは
 じめとして「罪過による変身」型説話を読んで推測できること
 は、天上界で何らかの罪を犯した場合、罰として異類に身を墮
 とされ、虎に変身して地上に戻されるといふ点である。「溪口
 道士」の例のように千人の人間を喰らうまでは許されない場合
 や「費忠」の例のように日ごとに異なる人間を喰らわねばなら
 ない場合のごとく、人間世界とは異なる規範の下に虎として活
 かされている。

この点に関して、「費忠」における「日曆」と同様にこの説

話群の背景にある当時の人々の観念を窺うにたる興味ある記事がある。「稽胡」(『太平広記』卷四二七・虎二)である。それには、以下のようにある。

慈州の稽胡は狩獵で生計を立てていた。ある日、鹿を逐っていたところ、石室に逃げ込んだ。中には朱衣を着た道士が机に座っている。道士は、「私は虎の王である。天帝が私に虎どもの食糧を管理させている。それぞれの虎には食べられる相手が決まっている。むやみに無実の者を食べているわけではない。いまお前の名前を聞き、わが食糧となる人間なのだ」と告げた。机の上には、朱筆、盃、名簿があった。道士が名簿を示すと稽胡は恐れおののき、助命を嘆願した。道士が言うには、私がお前を許さないわけではないが、天命である。お前を許せば私は一食を失うことになる。しかし、ここで遭ったも何かの縁であるので、救命の方法を授ける。わら人形を作り、それに自分の衣服を着せ、猪の血を三斗、絹一匹を用意すれば免れることができると言う。やがて群虎がやってきて、各自の食べる人間の指示を道士から受けて去って行く。翌日、用意した物を持参して道士の元を訪れる。わら人形を庭に立て、猪の血

をその傍らに置き、稽胡を高き十丈ほどの樹に昇らせ、綱で体を縛らせた。恐怖の余り落下するのを防ぐためだ。道士は部屋に戻ると一匹の虎に化して咆哮すること再三、樹上の稽胡を捕らえようと飛び跳ねるが届かない。そこでわら人形を啗くえて高く放り投げた。猪の血を啜すすって飲み干し、部屋に戻ると再び人間の姿に戻った。庭に出た道士は稽胡に樹上より降りてくるように言う。道士が朱筆で帳簿にある稽胡の名前に印を付けると、難を免れることができた。

(出典は唐・戴孚『広異記』)

変虎譚の研究は、話の内容が極めて残忍で悲惨であることから話自体に関心が向き、その背後にある物語を支える大きな構造を看過しがちである。「罪過による変身」型の変虎譚は大きく二つに区分できる。一つは、罪を犯した本人が罰として虎に変身させられるものと、他一つは本人が虎に変身するわけではなく、虎に食われるということでの罰を得るという形である。先に見た「溪口道士」「呉道宗」などが前者に区分され、「費忠」「稽胡」が後者に区分される。

とくに後者について一言しておく必要がある。「稽胡」を読んで明らかなのは、天界において罪を犯し罰を受けた者は名

簿に名前が記載され、差配役がそれぞれの虎にそれぞれが食すべき人物を指名する。犯した罪は判然としない場合が多いが、話の展開上はそれはあまり重要ではない。むしろ、虎に食われるという点にこそ関心が向けられたのである。虎によって食われた人間は名簿に点検を受けて罪は償われたことになる。

「費忠」では「日曆」、「稽胡」にあつては「簿籍」と表記される虎に食べられる人間の名簿は、さながら地獄や冥府における死者の名簿「録鬼簿」(あるいは「司命簿」)に似ている。言うまでもなく「録鬼簿」は人間の寿命を記載した名簿であり、寿命の尽きた人間を冥界からの使者がこの世に訪れて拘引して連れ去る。冥府からの使者は、有無を言わせぬ強引さと絶対の権能を付され、それに抗うことは基本的にできない。中には、同姓同名の者と入れ替わる場合、冥界からの使者に賄を渡して寿命を延ばす者、名簿にある寿命を書き換えてもらう場合などがあるのだが、それも説話における基本的構造の枠内にある。

「罪過による変身」型説話は、いずれにしても人間性を剥奪され、人知をわきまえない畜生に墮とされることによつて、虎の残忍性や凶暴性すなわち「獸性」が罰として人間に付与されることに意味がある。この人間性と獸性との間に葛藤や軋轢を認めたところに、変虎譚の進展があると思われる。その典型が

「費忠」に看取できる。本身が虎である老人は費忠を許し、虎の皮を再び得た暁にはすでに人事不省となり、再び費忠を襲つて喰らうことになる、これは明白であり、けつして「負約」つまり約束を破るわけではないと確認する段がある。人間の姿の老人として約束はするが、獸身としてはその限りではないと言うのであり、その間に厳然と境界があり、容易には越えられない隔たりがあつた。「虎の皮」はそれを容易に超越する手段としてあつたのである。

五 虎と人との間

さてここまで変虎譚のいくつかを概観してきたが、我々がもつとも注意しなければならない作品は、「罪過による変身」型説話の罪を犯した当事者が虎に変身する話柄、もしくはそれを応用した物語であり、小説としても完成度が高い。

「獸性」の獲得と離脱という点から見れば、他の所謂変身譚にみとめられる「狐」「魚」「蛇」「田螺」などと比較しても「虎」のもつ属性は著しく異なり、それだけ読む者に与える衝撃も大きくなる。したがつて、日常性を超越して人間世界とそうではない世界との区別を際立たせるにはより効果的である。

王辟疆はその著『唐人小説』において「人化して虎と為る」説話の代表として「張逢」を収録し、概略以下のように述べている。『太平広記』本と臨安書棚本『続玄怪録』と比較すると校勘上後者が優れている。宋代に『太平広記』を修訂する際に竄入があったことによる。人が化して虎と為る話は至って怪異なものである。他に卷四三二に「南陽士人」が所収されており、あるいは「張逢」と源は一つであり、伝播の途に異文が生じたのかもしれない。また、卷四二七には「李微」があり、李微が虎に変身する話を載せている。最後にある人間に戻る要素がない点は「張逢」とは異なる。明人が李景亮撰「人虎伝」としているがまったく根拠はない。⁸⁾王辟疆が指摘しているように、この三話の構成は基本的に同じであると言つてよい。

便宜上、王辟疆校本により「張逢」の内容をまず見ておくことにする。

南陽の張逢は貞元の末に嶺南に旅に出て、途中福州の横山店に宿泊した。時に空は晴れて日も暮れようとしていた。山に霧がたなびく景色は美しく、心引かれて山深くまで来た。すると目の前に深緑の気持ちの良さそうな草むらが広がっている。傍らの木の枝に衣を脱いで掛け、草の上身に身

を投じて転がるとなんととも言えぬ気持ちになった。あたかも獣が走り回るような心地がして満足して立ち上がると、体はすでに虎になっていた。紋様は鮮やかに見え、牙や爪は鋭く、力が漲り無敵に思えた。やがて跳躍疾駆して山を越え、谷を渡った。その速さは稲妻のようであった。夜になり、飢えが募ると犬や子豚を捕らえて喰らった。恍惚とした気持ちになり、心中福州の鄭録事を捕らえなければならぬと思った。そして路傍に身を潜めていると、ほどなく道行く人があり、見ると鄭札を迎えに出た役人であった。来る人に「福州鄭録事、名は璠殿。旅程によれば前の宿場、何時お立ちになったか」と尋ねる。人は、わが主人なりと答える。重ねてその服装と随行人の人数を訊く。三人の内、緑の衣服を着た者が録事であると答える。張逢は身を屈めてその到来を待っている。前を通過する刹那、張逢は飛びかかって鄭録事を啜えて山に逃げた。人は多くいたが追う者もなく、内臓と髪の毛を残して全て食べ尽くした。山林に一人いて、ふと心に思った。「私は本来人である。何の楽しみがあつて虎となったのだ。深山に囚われてしまったようだ。元の場所に戻り人の姿に戻るべきだ」と。元の場所に戻ると衣服はまだ枝に掛かつており、草むらも元のま

までであった。再びその上を転がると、元の人の姿に戻った。

張逢が失踪してより搜索したが杳として行方が知れなかった。帰還した張逢にその理由を問うたが、張逢は山中に自然を求めて寺院に行き着き、仏教談義に時間を経つのも忘れたと偽った。配下が近くに虎が出没して鄭録事を襲ったこと、この付近には猛獸が多いことを告げて、張逢の無事の帰還を喜んだ。その後、元和六年張逢は淮陽の公館に宿泊した折に、同宿の者らが「酒令」を設け、「己れの奇事を言う」を語り合うことになった。張逢の順番になり虎に変身した「横山の事」を語ると、坐客に鄭遐なる進士が急に怒りだし、張を殺せうとした。じつは鄭遐こそ鄭録事鄭札の息子であった。周囲の者が間に入り、郡将もこれを「故殺」（故意による殺人）ではないので張の罪を問わず、鄭遐を淮南に、張逢を改名して西方に行かせ難を避けさせた。（出典は、唐・李復言『続玄怪録』）

「張逢」の内容は明らかにこれまで見た変虎譚とは異なっている。虎への変身の動機は「罪過による変身」ではなく、また「発狂」「狂疾」でもない。草上における快適さや自由の獲得と言える。また、空腹のあげくに犬や子馬や仔牛を喰らったう

えに、いかにも唐突に福州の鄭録事を襲って食べなければならぬという場面がある。「張逢」だけを見ていてもこれは不明であるのだが、すでに見た「罪過による変身」型説話の「費忠」や「稽胡」で見た例から判断すれば、虎に変身した張逢が自らの責として喰らうべき人物として指示されたものとして考えることができる。そうであるとすれば、「張逢」は全体として変虎譚の類話を借りながら、新たな物語を意識していると捉えなければならぬだろう。その一つが、虎に変身しながら、人間の心を持ち、途中で「本人なり。何の楽しみありて虎と為る。自ら深山に囚はる、蓋ぞ初化の地を求めて復らざらんや」と述懐して、自らの判断で元の場所に戻り、人身を恢復しているところに類話との著しい違いがある。

じつはこの「張逢」には後日談があつて、鄭録事の息子に事が露見して復讐されるという要素が加わっている。同座にあつた周囲の者の仲介や郡将によつて裁かれ、「父の讐を聞くは、以て報いざるべからず。然るに此の讐は故殺に非ず。必ず逢を殺さしむれば、遐も亦た坐に当たる」と論評されて話は終わっている。この後日談は、説話の信憑性を増す効果があり物語の一貫性から見れば興味深い⁹⁾が、変虎譚の要素としてはあくまでも付加的なものに過ぎない。

虎への変身はいかなる意味があるのか、それが草上の快適さや自由の獲得にあるのなら、同時に空腹による「飢え」は何を意味するのか。「飢え」に象徴される「獸性」の増大と人間性との矛盾を「張逢」ではそれほど明確に描き出しているわけではない。

「張逢」と比較して虎と人との間における矛盾や相克が明確に意識されているのは、「南陽士人」であろう。「太平広記」によつて、その概略を見てみる。

南陽の士人は熱病を患い、十日ほど治癒しなかつた。あの夏の夜、門を叩く者があり、夢心地で聞き、目を覚まして対応に出ると文書を渡された。「お前は虎になる」と。文書には何も書かれておらず、印だけが押されていた。翌日、そのことを家人と話すも誰も知らず、文書だけがあつた。病氣も平癒したので一人で散策に出る。一里ほど行くと、山の麓に谷川が流れ、それに沿つて歩く。ふと自らを顧みると頭はすでに虎になり、手足もすでに虎に変わつていた。このまま帰つても家族を驚かせることになるので、恥ずかしさと憤りとを抱えて山に入った。二日を経過すると「飢え」が募つた。水辺に近づくと鱗鮒おたはぶちが見えたので掬つ

て食つた。美味であつた。次には兎を捕まえて喰らうといよいよ強くなつたと自覚した。昼は草藪に隠れ、夜に食糧を求めた。鹿を逐い、虎は人を食うと言ふのを思い出し、「採桑の婦人」を捕らえて喰らつた。ことに甘美であつた。路傍に隠れて通行人の様子を窺つた。柴を担つた人が見え、これを襲おうとすると、後ろで「襲うな」という声がある。振り返ると白い髻を蓄えた老人がいる。神人であつた。老人が言うには、「お前は天神により虎にされたのだ。その時期ももうじき終わる、そうすれば人身に戻れるのだ。もしここで人を食つていたら永遠に戻ることはできない。明日、王評事という人物が通るからそれを喰らうべきである」と言うや姿を消した。次の日の夜、路傍に身を潜めて待つていると、空中でのやりとりが聞こえてくる。王評事がやつて来る。朱衣を身につけ馬に乗り半酔の四十ばかりになる男が供を従えて近づいてくる。虎は飛びかかり馬上に仕留め、草藪に引きずり込んで喰らつた。供は散り散りに逃げた。川辺に戻つて姿を見ると、人の姿に戻つていた。それから五六年後、陳許の長葛県に出かけた折、県令が宴席を開き三十人ほどが出席した。主人は参会者にそれぞれ一人

「変化の事」を語らせる。この人の番になると己が虎に変身したことを語り、「変化の妄ならざる」ことを明らかにした。この主人こそ王評事の息子であり、父の仇を殺したが、官は事実を知り赦免した。(出典は、唐・皇甫氏『原化記』)

一見して明らかのように、「張逢」と類似するところが多い。同時に、構成上あるいは表現上に進展の跡もうかがえるようだ。変身の動機については、天神の子兆という形をとって首尾を踏まえている。虎になった主人公が「飢え」に苛まれる場面は、「張逢」では「犬彘駒犢之輩、悉無可取」とあるだけだが、本話においては蝌蚪、兔、鼈、人間という順に獲物が次第に大きくなるにつれ、「飢え」が増す激しさを巧みに伝えている。また、唐突に見える「王評事を襲え」という件も人物名こそ異なれ、両話は同工とみてよく、天界における「簿籍」による指示であることも前述した通りである。これも変虎譚を支える背景にかなる世界観が存在するかを知る契機となる。王評事の遺児による復讐にまつわる後日談も「張逢」と同工である。

ただ「南陽士人」で看過できぬ点は、虎になった主人公がたびたび人間としての意識を見せていることである。虎になって両日が過ぎ、飢餓を覚えて蝌蚪を食べる前に「自念常聞虎亦食

泥おも(自ら念ふ常に聞く虎も亦た泥を食すと)」と言い、兔や鹿を食べて「採桑の婦人」を襲う前に「吾聞虎皆食人(吾聞く虎は皆人を食ふと)」と「喰らう」ことを正当化する、すなわち垣間見せる人間性を振り払うように「獸性」を確認する言辞を弄しており、ただちに虎の本身になっているわけではないことが分かる。そして、通行の「荷柴人」を襲撃しようとして老人(神人)に止められ、「此の人変すと雖も、然れども心に猶ほ家を思ふ」と叙述されているように、人間と虎との間にある矛盾に逡巡し躊躇していることが看取できる。つまり、虎の持つ「獸性」と人間性との矛盾を露呈し、そこに注目している。

六 李徴の悔悟

以上を踏まえて変虎譚に背景にある世界観を見ておくことにしよう。人間にとって虎は身近にあつて危害を加え、場合によっては噛み殺され食われてしまう恐怖をもたらす猛獣である。その忌避すべき異類に墮する懼れが基本的観念として横たわっている。罪を犯した人間は、罰として虎に変身させられ、差配役によってそれぞれが殺すべき人物が振り分けられている。いかにも唐突に「誰彼を喰らうべし」と言う号令もこうした構造下

にあつて始めて理解できる。しかしこの要素は「罪過による変身」全ての説話にあるわけではなく、むしろ話の関心は虎に変ずるといふ点に移っており、虎に変身する非合理性を「狂疾」「虎皮」「佞鬼」¹⁰⁾を介在させ契機とすることで合理的な解釈を施し、種々の変虎譚を生んだと思われる。

この人間性と「獸性」との間にある矛盾や相克に対する自覚や内省を当時の士人が自らの心に抱える課題として捉えていたならば、それは唐代伝奇小説が獲得した新たな地平と言つてよいだろう。その意味で、最後に「李徴」を見るべきであろう。中島敦が翻案したのもこの作品を粉本としている。¹¹⁾『太平広記』本に基づき梗概を掲げる。

隴西^{ろうせい}の李徴は皇族の子であり、號略^{かくりやく}に家を構えていた。

若くして博学で文を善くした。天宝十年、進士に合格すると江南の県尉に任用された。性格は冷たく、才能を恃^{たも}んで傲慢であつた。同僚を卑下しては反発を買つていた。任期が満ちると官を辞して閉門し、人との交わりを断つこと一年ほどであつた。のち、生活に追われて呉楚の間を遊歴し、官職のつてを求めた。李徴の名声は呉楚にも聞こえており、人々からは厚くもてなしを受け餞別も多かつた。號略に帰

る途次、汝墳の旅館に泊まつた折に、突然發狂して徒者を鞭打つた。ひと月ほどすると病は益々ひどくなり、ある夜に失踪して行方知れずになつた。折りしも、陳郡の袁愔^{えんえん}が監察御史となつて嶺南に赴任しようとする。商於^{しょうお}の境を払曉に出発しようとする、駅吏がこの付近は虎の害が多く、昼間の通行しか安全でないと進言する。袁愔は怒つて、随行も多く天子の使いが怖れることもないと敢えて旅立つ。一里ほど行くと果たして草むらから虎が出てきた。袁愔はびつくりし、虎はすぐに草むらに身を隠した。すると「不思議なこともあるものだ。危うく友人を殺すところだつた」と人の声が聞こえてきた。袁愔はその声に聞き覚えがあつた。袁愔と李徴とは同年の進士で、昵懇^{じやくん}の間柄であつた。分かれて数年経つていたが、その声を聞き驚きかつ不思議に思つた。考えあぐねて、「隴西の李徴ではないか」と尋ねた。虎は呻^{うな}くように叫ぶこと数声、咽び泣くように思へた。李徴は袁愔の無事と監察御史としての出世を喜んだ。袁愔は李徴に何故に友人の前に姿を現さないのだと訝る。李徴は、じつはと虎に変身した経緯をつぶさに語る。呉楚の間に遊歴して汝墳に宿泊した折、狂疾を得て山谷中を行くうちに虎に変身したこと、人も獣も喰らわれないものはな

かつたこと、神祇じんぎに背いた行いを繰り返した身は友人に合わせる顔がないと伝える。袁慆は重ねて「異類となりながら、人の言葉を解するのは何故か」と聞き糾たづす。李徴は「いま姿は虎になっているが、心は人の時のままで冷静たいたであるからだ」と答え、無礼を詫わびる。しかし、務めより帰還する途次に再び目にするときには人の心を失い、襲いかかるかもしれないので殊に用心してくれと。李徴は思い詰めて袁慆に後顧の憂いを託す。思い残すことはただ號略に残した妻と子供のこと、書きためた旧稿数十篇を伝え残したいと。嶺南の勤務より帰還した袁慆は、約束通り李徴の家族の生活を救った。のち、李徴の子供がその棺を求めてきたので仕方なく事実を伝えた。袁慆は、兵部侍郎にまで出世した。(出典は、唐・張讀『宣室志』)

すでに見た「張逢」「南陽士人」と比較すると、話の構成は似ているものの、主題は大きく変化していることに気づく。①虎への変身の動機 ②虎に変身後の所業 ③李徴と袁慆の対話 ④家族への思い ⑤旧稿への未練と委託 などが主な相違点である。

虎への変身の動機は、「忽ち疾に被りて発狂す」とあり突然

のように思えるが、それには伏線がある。すでに疾をもたらした原因と思わしき李徴の人となり、性狷介にして人との折り合いが悪く、他を卑下して不遜なところがあり、倨傲にして閉門して一年に及ぶという経緯は疾を得た理由としては十分である。

虎に変身した李徴が袁慆と邂逅する点については、両者の友情という主題が本話の主軸になっていることが奪われがちであるが、じつはこれまでに見た変虎譚により明らかのように「罪過による変身」型にある、虎が喰らうべき人物として指名される枠組みを襲用していると見るべきで、変虎譚を換骨奪胎している。両者の邂逅が自然に見える背景として巧みであり、「李徴」の優れている点である。

また、人と虎の間における矛盾相克への言及は、虎になって大地を疾駆するとき「これより心愈いよいよ狼えんなるを覚おぼゆ」と人間の立場から「獸性」の獲得を自覚しており、袁慆になにゆえ人の言葉を話せるのかという問いに「我今形は変はれども心は甚だ悟れり」と告白して、虎の化身と人間の心との間で揺れ動く気持ちを描いている。さらに袁慆が嶺南より帰還する際に警戒を促す言葉「必ず当にその平生へんせいに味あじわらうべきのみ。此の時君の軀からだを視れば、猶なほ機上の一物のごとし。君も亦た宜しく其

の警徒を厳にして以て之に備ふべし」と、後日は人間の心を失い、袁倬との関係も忘れ、虎の本身になり切り、袁倬を襲うと伝えている。別れて後の人の心に戻れぬ懼れを表白している。そして他の類話と著しく異なるのは、後顧の憂いを袁倬に託す場面である。家族への思いと旧稿の伝承を伝え、化身以前のこの世における未練を残している。虎に変身しながら、なお人間の心を見失わずにいるのは、この世に残した強い未練にあることを暗示している。

加えて何よりも留意すべきは、この作品の篇幅の殆どが両者の対話で構成され、とりわけ李徴の独白と言ってもよいほどに重きが置かれていることである。これは本話が変虎譚を枠組みとして利用しながら、人知の及ばぬ事柄と人知の間、あるいは人間の心で制御できる事柄とそうでない事柄の間で揺れ動く往時における士人の心情描写に主題がすでに移っている証左ではあるまいか。「虎の心」(獸性)を制御できれば人間性を担保でき、そうでなければ「獸性」に負けて異類に身をやつすことになる。従来の変虎譚の枠組みにこうした主題を託し得た作者は優れた技量の持ち主と言えるだろう。

また、こうした人間の持つ自らを顧みる「自照性」、新旧を巧みに繋ぐ構成員や表現力、新たに自覚した主題を六朝以来の

故事に取材し、換骨奪胎して作られていることは、唐代伝奇小説が獲得した可能性と言って良いだろう。

七 中島敦が認めた唐代小説の主題

中島敦が取材した中国古典は「李徴」であるが、依拠したテキストは『太平広記』本ではなく、おそらく『唐人説書』本であろうと考えられる。両者の間には篇幅にして約半分ほどの異文が存在する。あらずに大きな相違があるわけではないが、異同がある。いま『国訳漢文大成』文学部第十二卷「晋唐小説」所収『唐人説書』本「李徴」に基づき、『太平広記』本との主な相違点につき触れておく。詳細にわたる校勘は煩瑣になるので割愛し、概要のみを挙げることにする。主な相違点は三つある。

一つは李徴と袁倬とが邂逅する場面でのやりとりがやや詳細に叙述される点である。異文ではあるが、内容的には大きな相違はない。二つ目は病を得て発狂し異類となる場面、飢餓に迫られて堪えられなくなり獣のみならず人間をも襲うことになる点である。より叙述が詳細になり、喰らう人間は「婦人」になっている。これも異文ではあるが内容的には相違はない。

三つ目が大きく異なる点である。李徴が旧稿三十篇を伝授し

たのち、「蓋し吾が外異なると雖も、而れども中異なる所無きを表はさんと欲し、亦た吾が懐ひを道ひて吾が憤りを擻べんと欲するなり」と言い「獸性」と人間性との矛盾を指摘したうえで、七言律詩を作る。袁修はこれを聞いて「君平生自ら恨む有るなきを得んや」と、その憤懣に同情し才能を改めて賞賛する。李徴は続けて、この世は陰陽二儀から成り、時の巡り合わせや運命は自分では知り得ない。孔子の弟子の顔回や冉有でさえも貧窮や難病という運命からは逃れられなかつた。自らに顧みれば、昔南陽の郊外で一人の寡婦と私通したことがある、その家の者が私を害そうとするので、再び寡婦と逢うことができなくなつた。私は火を放ち家人数人を焼き殺した。それこそ自らの「恨み」であると述懐する。この極めて衝撃的な要素は『太平広記』本には存在しない。主人公李徴が虎になるにはそれなりの罪（作品中では「恨み」）がなければならぬとの考えで追加された要素と思われる。

『唐人説薈』は清・陳世熙の編輯になり、唐代の小説を主にして五代・宋に及ぶ作品一四六種を六集に分けて収録している。しかし、明人の古籍を改竄する風潮を無批判に継承して編集は蕪雜杜撰な傾向にある。この『唐人説薈』本「李徴」は、じつは明・陸楫等の編纂になる『古今説海』（説淵五二、別伝五二）

に所収される「人虎伝」をそのまま襲用しており、したがって、中島敦が影響を受けた作品は、結果的には『古今説海』本「人虎伝」ということになる。いずれにしても明代において加筆追加された要素は唐代伝奇小説本来のものではないが、人間の心の中にある克服すべきものとそれに掣肘される人間の在り方に対する相克と矛盾は唐代伝奇小説にすでに認めうる主題であることは前述した通りである。

中島敦は『古今説海』本「人虎伝」に基づき、かつ中国の変虎譚を襲用しつつ、南陽の郊外での寡婦との私通の要素を採用していない。これは「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」に駆られたがために「猛獸」になつたと、自作の主題をこの点に絞り込んでいるからである。また、原作「李徴」では、最後まで袁修の前には虎に変身した姿を見せていないが、「山月記」の最後では袁修一行に月を仰いで咆哮する姿を見せて印象深い。

中島敦が「李徴」を粉本とした「山月記」において、文学に囚われ偏頗な考えに左右された人間の孤独と葛藤を巧みに描写したことはすでに定評がある。しかし、その主題はすでに唐代伝奇小説には認めうるものであり、その点を鋭く見抜いた文学者の目は当時の作品の意義を的確に捉えていたと言えるであろう。¹³⁾

八 まとめに代えて

変虎譚の諸相をまとめるに当たって、類話の中でも人と虎の間に注意を払い、「李徴」をはじめとする作品解釈に示唆を与えると思しき作品を指摘しておきたい。「太平広記」巻四三三・虎八「僧虎」である。袁州の山中の僧侶が虎の皮を手に入れ戯れに身に纏うと、道行く人が本物の虎と思ひ込み携帯していたものを捨てて逃げていった。僧はそれを手に入れ喜んだ。あるとき虎の皮を脱ぎようと試みるが、どうしても脱ぐことができない。「飢え」に迫られ獲物を求めるが捕らえることができない。そこで道行く僧侶を襲って喰らった。そこで心に思う、「私はもと人間であり、幸いにして僧侶となったものの、禁戒を守れず、生きたまま虎に変じた。これほど業力の大なる者はいない」と。すると虎の皮は脱げ、一裸僧になった。もと居た寺はすでに廃され、結局は臨川の崇寿院に身を寄せた。時の住持円超上人に相談をする。上人は、人が異類に変化するの「念」によると論ず。

虎に変身した僧侶は、鬼神に使役され、夜には山中を歩き回り一年中休息することが許されなかった。「甚だ之を厭苦す。

形骸は虎と雖も、而れども心は歴々然として人なり」には、虎と人との間に横たわる相克と矛盾とが端的に窺われる。また上人の言葉「生死罪福は皆念に由りて作る。刹那の間に、天堂と地獄とを分かつ。豈に前生と後世と在らんや。爾は悪念にて虎と為り、善念にて人と為る。豈に証に非ざらんや」という言葉からは、変虎譚の物語がいかなる思いで伝承されたかが理解できるようである。

「僧虎」の出典は「高僧伝」であり、全体に仏教説話として潤色されているが、その主題は「人化して虎と為る」説話の本質に通じる所がある。

注

- (1) 「人化して虎と為る」説話の六朝志怪から唐代に及ぶ作品については、莊司格一『中国中世の説話—古小説の世界—(白帝社、一九九二年)所収「六、虎」及び「附I「人虎伝」と「山月記」—詩を手がかりに」、富永一登『中国古小説の展開』(研文出版、二〇一三年)第四章「六朝志怪から唐代伝奇へ—異類婚を中心として—」第一節「人虎伝」の系譜「六朝化虎譚から唐伝奇小説へ」が考察を加えている。
- (2) 李劍国主編『唐宋伝奇品説辞典』上巻(新世界出版社、二〇〇七年)所収、李麗茹「申屠澄」五六三頁。
- (3) 李道和『歳時民俗與古小説』(天津古籍出版社、二〇〇四年)下篇「從

- 歳時民俗生發的小説母題研究第一章「天鷲處女型故事的成型」および第二章「天鷲處女型故事的變遷」中の「虎女故事」参照。
- (4) 「白鳥処女説話」については、鐘敬文『中国的天鷲処女型故事』（『鐘敬文民間文學論集』下冊、上海文芸出版社、一九八五年、初出一九三三年、君島久子「中国の羽衣説話」その分布と系譜（日本中国学会報二二集、一九六九年）参照、「白鳥処女説話」(Swan Maiden Type)は、『國際昔話話型カタログ』(ハンス・イェルク・ウター著、加藤耕義訳、小澤昔ばなし研究所、二〇一六年)によれば、「超自然的、または魔法にかけられた妻(夫)またはその他の親族400」中の「400いなくなった妻を捜す夫」(3)に該当する。
- (5) 小澤俊夫『昔話のコスモロジー——ひとと動物との婚姻譚——』（講談社学術文庫、一九九四年）一五一頁。
- (6) 岡田充博『唐代小説「板橋三娘子」考——西と東の変遷変馬譚のなかで——』（知泉書館、二〇一二年）第三章「中国の変身譚の中で」二五三頁。名簿に記載された名前に従って虎に食われるという話は、他に『太平広記』卷四三三・虎八「柳井」には「行二十里至一茅庵、入其中。不見有人、惟見席上案硯朱筆。有一卷文書皆是人名、或有勾者、有未勾者、己名在焉。」とあり、「誰彼を喰らう」と明言する話は、ほかに『太平広記』卷四三二・虎七「石井崖」に「石井崖者初为里正、不之好也。遂服儒、號書生。因向郭買衣、至一溪、溪南石上有一道士衣朱衣、有二青衣童子侍側。道士曰、我明日日中得書生石井崖充食、可令其除去刀杖、勿有損傷。」がある。莊司格一氏は注(一)所引著書において「南陽士人」の作中「王評事を喰らうべし」とする部分について「評事というものは裁判官であり、それをとって食べて人間の姿に戻りたいというのも、裁判そのもの、また官憲への反抗の意をふくむものと解釈されよう。」(二六〇頁)と説明するが、憶測であり、この説話を理解する上で正しくない。
- (7) 王辟疆『唐人小説』（上海古籍出版社、一九七八年）「按『太平廣記』卷四二九、亦引此文、字句多異。而『其時逢方何之』句下、缺二十一蓋、尤爲顯然。其他異文、雖可理解、審視數四、皆不至怪。惟廣記四百三十二廣陽士人一條、似與張逢事同出一源、或是傳聞異辭、故復形及復仇、亦大略從同。廣記四百二十七尚有李微一條、亦記徵化虎事、與張逢亦頗相類。但後段無復形事、與逢又異。明人有改題人虎傳者、下題李景亮撰。則全無依據也。」また、魯迅は『唐宋伝奇集』（魯迅輯録古籍叢編第二卷、人民文學出版社、一九八九年）「序例」に「繼復讀大輿徐松登科記考、積微成昭、鉤稽淵密、而於李微及第、乃引李景亮人虎傳作證。此明人妄署、非景亮文。」と指摘している。
- (8) 変虎譚の要素としてはあくまでも付加的なものに過ぎないが、物語の要素としては首尾一貫して作品の完成度を高めている。同時にこの要素は、変虎譚の当初よりあった可能性を指摘できる。南朝宋・東陽無疑撰『齊諧記』を出典に持つ「師道宣」(『太平広記』卷四二六・虎一)には、以下のような話がある。「晋の太元元年、江夏郡安陸県の師道宣は若くして発狂して虎になった。教えきれぬ人を喰らい、のちに樹上採桑の婦人を襲い喰らった。その女性の簪や腕輪を山中に隠し、のち人間の姿に戻りそれらを手に入れた。その後、殿中令史として仕官した。夜、仲間と(天地変怪の事)を語り合う時に発病して虎になり、人を喰べたことを語り、喰べた人の名を明かした。座中に肉親がいて、役所に訴えられ、健康の獄中で餓死した。」六朝志怪小説らしく、荒削りだが唐代の変虎譚の要素、すなわち「採桑の婦人を襲う」必然性、人身の恢復、後日談における復讐譚がすでに認められる。
- (9) 「鬼兪」(あるいは「山魃」とも言う)は、本来虎に食われた人間が鬼となり虎に使役されて悪事を働く者を指す。『太平広記』には、この説話群を認めることができる。

- (11) 山敷和男「人虎伝」と『山月記』(『漢文学研究』第八号、一九六〇年)を参照した。
- (12) 八幡健吾「山月記と唐人説書本人虎伝」(『香川中国学会報』第五号、一九六四年)による。
- (13) 『古今説海』本は、李徴を「李徴」、袁儼を「袁儼」としている。「人虎伝」を『古今説海』『唐人説書』本以外に『唐代叢書』本に出ると指摘する向きもあるが、『唐人説書』『唐代叢書』は異名同書である。清・陳世熙が乾隆五七年(一七九二年)に先ず『唐人説書』として上梓し、のち清・王文浩が嘉慶十一年(一八〇六年)『唐代叢書』と改題して刊行した。
- (14) 中島敦が唐代伝奇小説の主題を的確に把握し、自らの創作に活かした点については、上尾龍介「人虎傳と山月記」(『中国文学論集』第四号、一九七四年)にすでに指摘がある。
- (15) 南朝梁・慧皎『梁高僧伝』、唐・道宣『唐高僧伝』、宋・贊寧『宋高僧伝』の何れにもこの説話は認められない。

【付記】

(第二章「申屠澄」と「白鳥処女説話」については、赤井益久・岡田充博・澤崎久和共著「『河東記』訳注稿(七)」(名古屋大学『中国語学・文學論集』第三十三輯、二〇二〇年二月発行)所収「申屠澄」(赤井益久担当)【参考】の叙述と一部重複がある。)